

港北区災害ボランティア連絡会 News



事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸町13-1吉田ビル206 港北区社会福祉協議会

TEL 045-547-2324 FAX 045-531-9561

FB 港北区災害ボランティア連絡会

125号

2024年2月

*入会は随時受け付けています。

*あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください。



緊急特集 能登半島地震

能登半島地震を知ったのは旅行先のメキシコでした。異国でやきもきしていた時に座間の濱田さんが珠洲市を支援するとの投稿を見たので、すぐに連絡を取り災ボラのメンバーにも物品提供の依頼をしました。座間を通しての支援は結局実現しなかったものの、集まった品物は無事全量能登に届けることができました。

また物資を配布し終わった後は、ゆめ風基金の理事として被災地の障害児・者の避難状況の把握に動きました。

(宇田川)

- 1、今回の支援のきっかけー防災仲間とのつながり
 - 2、物資の収集・提供とそのルール
 - 3、避難所環境
 - 4、対口支援
- などの問題をまとめてみました。



車いっぱいになった支援物資

きっかけは「つながりが備え」

濱田さんは座間災害ボランティアネットワークの代表であるとともに、全国組織であるSL 災害ボランティアネットワーク(セイフティーリーダー)の代表理事もしています。以前当会員向けに防災講座で話していただいたことのある方ですが、私の長年の防災仲間でもあります。

ネットで濱田さんの計画を知り、連絡を取り協力させてもらうことにしたのですが、私が挙げた品物リストが珠洲市の要望とは違うことがわかりました。そこで集まった物資をどうしようかと思つたところに神戸の被災地 NGO 協働センターの活動の連絡が入ってきました。

被災地 NGO 協働センターは 1995 年の阪神淡路大震災の折神戸で活動したメンバーが作った災害救援団体です。「困った時はお互い様」を合言葉に各地の災害救援活動をしてきました。前代表(現顧問)の村井さんは、震災がつなぐ全国ネットワーク(震つな)の初代表も務めた日本の災害ボランティアを代表する 1 人です。私は協働センターの会員でもあるため、ML(メーリングリスト)で能登半島地震の支援活動を見ていましたが、そこで具体的な支援先を知り神戸と連絡を取り七尾市中島町の避難所への支援を決めたのでした。

横浜を 1 月 15 日の朝 6 時に出発し、途中小諸の山吹味噌さんにより味噌 5kg 箱を 5 箱とかりんとうの寄付を車に乗せました。これは 1995 年に現在の社長さんが阪神淡路大震災でボランティア活動をして以降協働センターとつながり続けていた結果の支援です。これも「つながりが備え」の一例と言えるでしょう。

「つながりが備え」は連絡会の方針にも使っていますが、災害時に一番生きる言葉です。

避難所の様子

途中信越道の雪に悩まされながら北陸道からのと里山街道と進みましたが、のと里山街道は高規格道路であるにもかかわらず地震で被害が生じて途中からは通行止めです。途中のインターチェンジで降ろされ、後は「迂回路」の指示に従って走るしかありません。(写真1)



写真1 通行止めと迂回路の表示 建物被害も見える

夕方ようやく七尾市中島町小牧の小牧公民館西岸分館に着きました。運営責任者の A さんにご挨拶をして、早速積んでいた荷物の中から必要な品を選んでもらいました。ここは指定避難所であるにもかかわらず、当初は行政からの支援が来ず困っていたそうです。

なぜ中島町なのか

能登半島は 2007 年、2023 年と大きな地震が続いていました。協働センターは 2007 年以来能登との付き合いを重ねていました。若者の減少から存続が危ぶまれていた中島町の「お熊甲祭り」にも大学生など若者を引き連れ参加していました。このような繋がりが今回の震災での支援先を速やかに決定することにつながりました。それまでの活動はこんな本にもなっています。(写真2)



写真2 震つなが作成した2007年支援の記録

ボランティアはまだ来ないでほしい、は正しいか

東日本大震災の時も今回もボランティアが現地に入ると現場が混乱するとの声が行政から出されましたが、現場はボランティアを必要としています。経験のあるボランティアが入ることで避難所運営のノウハウを伝えたり、行政や社協をサポートすることができます。炊き出しや足湯はとても喜ばれています。また重機ボランティアは道路啓開や被災した住宅内からの貴重品の取り出し、危険住宅の安定化などで大事な働きをしています。これらは資機材と経験があるからこそできる支援です。

経験のあるボランティアが率先して被災地支援をする事は急務です。それを「ボランティアはまだ来ないでほしい」と知事が言ってしまうと、今回のような先遣的活動にも支援が集まらなくなってしまう危険性があります。それをそのまま伝えるマスコミも含めまだまだ災害ボランティア活動への正しい理解が進んでいないことがわかります。

被災地 NGO 協働センターは 1 月 2 日には現地に入りマスコミ情報ではわからない現地の様子を具体的につかんでいました。震つなも ML で各団体の動向を確認しあっています。私もそれらの情報を確認しながら協働センターと連絡を取りあったのでした。

どんな物資が必要か

今回は発災から 10 日ほど経っての呼びかけでしたが、過去の経験から以下の物の提供を呼びかけました。

- ・清潔を保つもの(紙類、ウェットティッシュ、生理用ナプキン、おむつなど)
- ・寒さ対策(使い捨てカイロ)
- ・簡易トイレ
- ・カセットコンロとボンベ
- ・食品(米、パックご飯、レトルト食品、乾物、みかん、お菓子など)
- ・ブルーシート

その中で多く集まったものは、トイレトペーパー、ティッシュ、ウェットティッシュです。一方全く集まらなかったものは米、乾物、みかん、カセットコンロでした。乾物やみかんは被災地で圧倒的に不足する野菜や食物繊維、ビタミンCを補う重要な品ですので残念でした。

一方依頼していないにもかかわらず寄せられた品物もありましたし、ティッシュに葬儀社の名が入ったものはとても届けられません。長期保存していたウェットティッシュも乾燥してダメになっていました。

お届けした中でお菓子は皆さん口寂しさを覚えていたのでとても喜ばれました。そこで西岸分館避難所にはいただいた支援金で七尾市のスーパーで和菓子とみかんを買い再度お届けしました。高齢者が多かったため和菓子はとても喜ばれました。ただあとで漬物を忘れたと思い出しました。神戸でも中越でも喜ばれたのが漬物だったのです。失敗しました。

これらの物資提供の呼びかけは連絡会会員のほか、児島さんが普段ニュースを配っている日吉・下田地区に、私が地元の町内会の班にお願い文を配布しました。帰宅後は報告書をお届けしました。

「〇〇だろう支援」は厳禁

物資を提供するときに、これも必要だろう、これも役に立つだろうと思い込む支援は、善意に基づくものであったとしても現地のニーズに合わないことが出てきますし、その結果不用品は廃棄せざるを得なくなります。これは過去の災害で常に出る問題です。北海道南西地震では奥尻町が函館市に保管していた衣料品を膨大な保管料のため処分したところ非難の声が出ました。しかしこれは非難する方が間違っています。

今回必要性が高かったものは石油ストーブでした。これは厳冬期と言う時期の特殊性によりますが、暖かさを確保するためにはキャンプ用のウレタンマットの配布も必要です。ウレタンマットはプレハブ建ての仮設住宅の寒さ対策にも使えるため長期に役立ちます。今後の支援対象品として考えてよいでしょう。仮設住宅は本当に寒いからです。

避難所の環境は

小牧公民館西岸分館避難所はもともとあった石油ファンヒーターが生きており、灯油の寄付や布団の寄付が早期にあったことで暖かい環境でゆっくり眠ることができる恵まれた環境でした。それでも布団が来るまでは畳の上でもゆっくり寝られなかったそうです。体育館などではストーブがあっても部屋全体を暖めることはできず、段ボールを敷いただけでは寒さを防ぐことはできません。災害救助法が適用されると、避難所には食費(一人当たり一日1180円)や布団など



写真3 ↑ 避難所の毛布類

が支給されるのですが、いつの災害でも配給には時間がかかるのが実態です。また食事の内容も偏るため対策が必要です。(写真3、4)

また寒さ対策も大変ですが、去年の夏のような暑さでは避難所に入ることも難しくなるでしょう。体育館にエアコンを導入する動きもありますが、大変難しい問題です。中越沖地震(発災は7月)では避難所に氷柱を置いてみましたが、焼け石に水でした。

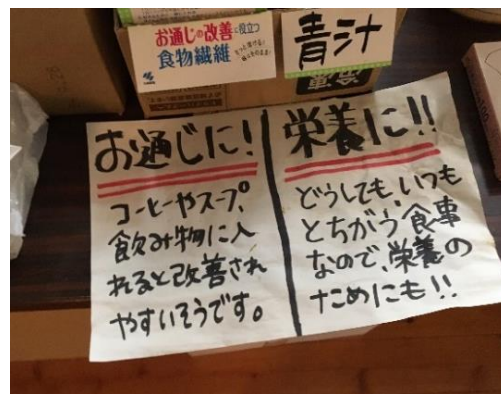


写真4 避難生活は圧倒的に野菜不足になる

トイレ問題

災害時のトイレはいつも深刻です。開いているコンビニもトイレは使えませんでした。(写真5)私が行った時点では七尾市の避難所には全て仮設トイレが設置されていました。ある避難所にはトイレカー(写真6)もありましたが、仮設トイレの設置方法には問題点を感じました。(写真7)トイレをどこにどのように設置するかはとても大切です。夜間でも使いやすく、かつ性被害を起こさないための配備の工夫が求められるのですが、どこの避難所も男女のトイレを並べて設置していました。仮設トイレは一つ一つバラバラにできますから男女のトイレを分ける設置は簡単にできるのですが、まだそこまで考えが及ばないのでしょう。



写真5 コンビニのトイレ表示
店員さんはどうするのだろう



写真6 トイレカー
車椅子対応だともっと良い

TKB48 を実現しよう

「TKB48」と言われて分からないと思いますが、これは避難所・避難生活学会が Toilet と Bed と Kitchen を48時間以内に避難所に届けようとの提言です。日本と同じように地震が多発するイタリアではすでにこれが実現しています。

イタリアには防災局があり、そこに登録したボランティアが有給で活動する仕組みがあります。イタリア各地に配備されているテ



写真7 男女のトイレが並んで設置されている

ント、トイレ、キッチンカーを48時間以内に現場に運び込めるようにしているそうです。キッチンカーが来ることによって温かい食事をテントでとることができます。ワインも出るそうです。アメリカには FEMA (連邦緊急事態管理庁) があり、イタリアの防災局と同じように各組織の役割調整をします。日本の防災対策は内閣府の防災担当が担っており、災害時には自衛隊が出動していますが、日本にも FEMA や防災局のような災害対策を専門とする組織と実行部隊が必要だとの声をもっと大きくすることが必要です。

日本の避難所はその悪環境のため今回も災害関連死を発生させています。避難所の寒さや悪条件のトイレを我慢するため飲食を避けるなど、悪条件が重なり関連死を誘発します。半島部から金沢市内の病院へ患者や高齢者を移送するための救急車の列を何回も見ましたが、これらの方には移送自体がとても負担です。

災害大国日本の防災対策にどのくらい予算をつけるのか、議員と有権者が真剣に考えるべき問題です。

見えにくい障害者の課題

また福祉避難所も建物被害や物資不足、運営者の不足などで事前に登録した福祉避難所も7割近くが使えないとの報道がありました。障害者施設の被害状況や障害者の動向を知りたく、七尾市の福祉課や市社協を訪問したのですが、いずれも状況を把握していませんでした。そこで三日目に各避難所を回って確かめたのですが、障害児は避難所にはおらず在宅避難をしているらしいことがわかりました。毎日被災した自宅で子どもの面倒を見るのは大変だと思われませんが、それ以上は個人情報で確認することができませんでした。

またあるグループホームは昨年4月に新築した建物が地盤沈下で傾いたうえ、車いす利用者は震災以来一回も入浴ができないと困っていました。自衛隊が設置するお風呂に車いす利用者は絶対に入れません。足腰の弱った高齢者も同じです。

時間経過による必要な物資の違い

発災当初は何もかもが不足していますが、西岸分館のように井戸水を自分たちで復活させてトイレとつないだりする技術を持っていたり、自炊できる環境では、そのレベルを維持するためのパン、食器、ポリ袋、味噌、お菓子などをお渡ししました。翌日伺った輪島市門前町の興禅寺さん(ここも協働センターつながり)では味噌、かりんとう、軍手、トイレトーパー、ティッシュ、ウェットティッシュ、ブルーシートなどをお渡ししました。これらは興禅寺を拠点とするボランティアを支える品です。興禅寺さんは2007年の能登半島地震以降「まけないぞう」を寄進箱においてくださったように被災地 NGO 協働センターとのつながりが強いのです。



キッチンカーで温かいパスタを調理、提供
避難所・避難生活学会提供



門前町の被害

残った品はご住職に案内された門前町の文化会館の避難所に届けました。ここにはまだ十分な支援がきていないようで、ティッシュ、トイレトーパー、ウェットティッシュ、消毒液、歯ブラシ、タオル、防寒具、カセットボンベ、カイロ、マスク、お菓子等残りの品全部を渡しました。カセットコンロが欲しいと言われながら1つしか持参できなかったのが残念でした。

ただ伺った3カ所全てで不要とされたものが生理用ナプキンでした。今回の避難所は高齢者が多く、能登地方の高齢化率を表す結果でした。持ち帰るのはもったいないため七尾駅前の商業施設に設置された私設の物資配給所に寄付しました。この建物は市の福祉課や七尾市社協が入っているため、多くの市民が必要な品を選んでいました。廊下だけでなく大きな部屋いっぱい物資が並べられており、市民は必要な品を自由に選べる有効な仕組みです。（写真7）



対口支援の役割

西北分館の避難所には対口支援（総務省の応急職員派遣制度）で来た他県の行政職員がいました。12時間交代で避難所に詰めています。避難所支援の役割は控室にだけでなく、積極的に避難者と交わらないと支援すべき内容が見えてきません。この避難所のリーダーAさんは一度過労で倒れたそうで、そこから避難してきた住民も自分たちも手伝わなければとの意識が変わったそうですが、運営で一番大変なのは色々来る支援物資の管理だと言っておられました。そこで応援職員にエクセルで物品管理表を作ってほしいとお願いしました。またフレイル防止のために一日二回ぐらい体操指導をしてほしいともお願いしました。ニーズは目の前にあっても、見ようとしないと見えないものだと感じました。

連絡会会員の私たちがやるべきこと

今回の死者129名（1月30日現在の名前がわかっている方）のうち111名が家屋倒壊による死亡です。国は生活再建支援法に上乗せして300万円を支給するようですが、事前の耐震補強にもっと補助金をつけておく方がよほど有意義です。仮設住宅の建設費も一棟600万円、解体にまた100万円かかります。事前対策の有効性が金額的にもわかります。

私たちの支援体制も十分とは言えませんでした。地域の災害ボランティア団体の役割は日ごろの防災啓発と災害時のボランティア活動ですが、それらに必要な知恵は現実の災害に学ぶことからです。これからも起こる災害に積極的に対応する力をつけていきたいものです。



→ 自宅に殺されない対策は必須
← ペットボトルでは間に合わない
水を入る容器の準備も大切

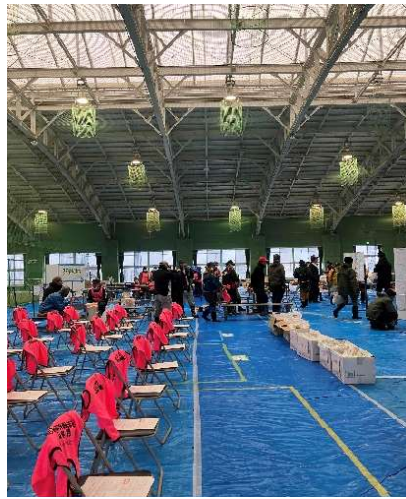


新潟からの報告～液状化の現実

能登半島地震に伴う新潟市内ボランティア(個人登録)作業メモ 1月27日-2 伊藤郁夫(文責)

●期間2024年1月25日(木)～26日(金) ●作業日 1月26日(金)8時30分～16時 新潟市西区

●集合場所 みどりと森の運動公園 (屋内コート) 西区社協ボランティアと日赤担当者から作業の諸注意あり。ボランティア計70名が7班に分かれボランティア車に分乗し被災地区にて作業開始。



- 発災当時は、道路が川のようになったとの事。液状化で道路上に上がってきた大量の砂が側溝に溜まったままになっています。専用リフター工具で蓋を二人で持ち上げ、スコップですくい出し、土嚢袋に入れる。水分が多くあり重い。70人が作業し、約100mの側溝清掃作業。側溝は幅 30cm、深さ 50 cmくらいで狭く、手作業による肉体労働。ボランティア全員は社協のビブス着用し氏名を記載。
- 液状化等の被災宅は約9千戸、住宅内の片づけ、清掃、家具移動等を行ってきたが、下水管が使用できない地区は仮設下水管工事中。被災宅は避難所生活しているとの事。
- 作業中の撮影は、個人情報上で禁止です。許可を頂いたものを掲載させていただきます。

新潟市西区社会福祉協議会 HP 等にてボランティア受け付け中。2月10日迄の作業予定。 以上

ボーイスカウト横浜第79団の伊藤郁夫さんから、新潟での被災地支援のご報告をいただきました。石川県と新潟市社協にボランティア登録をされていたところ、新潟市社協から連絡があり、1月25日～26日にボランティアに入られたということです。作業は液状化した住宅地の側溝等の砂泥だしをされたそうです。当日、許可をいただけた範囲で、現地の写真などをご提供いただきました。

セミナーを開催しました

2024年1月28日（日）に日本トイレ研究所の加藤篤さんをお招きして、発災時のトイレの「現実」やわれわれが被災者となった時に備えるべきことなどについて、約2時間にわたり、貴重なお話をいただきました。参加者は、会場参加が22名（会員8名、一般11名、社協3名）、zoom参加7名（会員2名、一般5名）でした。

あまりの悲惨さに「マスメディアでは紹介されることがない」避難所のトイレの「現実」を写真と共にご紹介いただいたことで、被災時の課題を明確に伝えていただくことができました。

アンケートでは参加された全員の方が「参考になった」といわれていました。一方で、セミナーでの加藤さんのお話では、
➤ 下水道の平均復旧日数は、阪神淡路大震災・東日本大震災・熊本地震すべてで約30日
➤ 大人1名の1日のトイレ回数は5回、最低限の3日分としても携帯トイレは大人1名あたり15個必要

ということでしたが、私も含め参加者全員が「足りないぞ」と思わされたセミナーでもありました。昨年度は、横浜市の災害時のトイレ対策の現状をお教えいただき「横浜市頑張ってくれているね」と少し安心したところもありましたが、今回のセミナーでは「行政の準備を生かすためにも、行政やボランティアの負担をかけないように自ら備えることがいかに大切か」を改めて認識させられたセミナーでもありました。

また当日は、株式会社セットアップ横浜さんから徳丸社長以下3名の方が参加いただき、セミナー参加者ではありますが非常用トイレの「プロ」として携帯トイレのなかの凝固剤の使用期限など貴重なお話を聞かせていただけました。凝固剤は基本10年は大丈夫。かつ、揉みほぐせば機能が復活することもあるそうです。加藤さんからは、排泄物の成分のほとんどが水分であり、排泄物を凝固剤で固めることが、その後の「処理」や「保管」の観点からとても重要だとお教えいただきました。「そういえば猫のうんちも、猫トイレのなかにしばらくあるとカラカラになっているな〜」などつまらない感想をもった中島でした。

(中島)



【編集後記】

- 能登半島地震の復興には時間が掛るとの報道を見聞きします。先日、YMCAでは新横浜駅前で街頭募金を実施しましたが、横浜にいて出来ることを継続して行きたいと思います。（鴨下）
- 先月、ボーイスカウト横浜第8団も義援金募集をしました。氷雨の降る寒い日でしたが、多くの方にご協力いただきました。総額で149,131円を日本赤十字社に送金させていただきました。（中島）
- 支援物資？声掛けをいただいて直ぐに思いつかず、社協にも少ししか運べず、情けないことです。輪島は50年前に旅行。良い思い出しかありません。もう体を張ったボラは出来ません。支援募金をさせていただきました。（付岡）